

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 国学者の近代：学問の蓄積と継承

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大沼, 宜規 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001201">https://doi.org/10.57529/0002001201</a>

令和4年度 公開学術講演会

## 国学者の近代 —学問の蓄積と継承—

大 沼 宜 規

ご紹介いただきました国立国会図書館の大沼でございます。本日は「国学者の近代—学問の蓄積と継承—」というタイトルでお話をさせていただきます。1時間半弱という時間ではございますけれども、しばらくお付き合いいただけましたらと存じます。

まず、私のような者を貴重な講演会の講師にお呼びいただきました、笹生衛先生をはじめとする國學院大學の皆様にお礼を申し上げたいと存じます。また、今回宮本誉士先生、渡邊卓先生そのほか御担当くださいました先生方、事務の皆様にはいろいろ手配に御尽力をいただいたことと思います。この場をお借りして、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

実は、今回お話をいただきまして、お引き受けしたものが大変迷いました。と申しますのも、國學院大學は、国学研究において中心的な、あるいは最先端の研究をされている学校でございます。そのような場で私のような一介の図書館員がお話するというのは、大それたことと思ったわけでございます。

ただ、図書館員というのとは1つよいことがございまして、仕事の中で本を読むことはできませんが、本に触れる機会は非常に多くあります。閲覧室に書庫から資料を持っていくとき、それを片づけるとき、あるいは蔵書点検などと申しますけれども、書庫の中で本を調べるなどというようなこともあります。そんな仕事ですから、図書館員というのとは、書物自体のこと、コレクションとしての蔵書や蔵書家、文献を愛する学者などに強い関心を持つという面がございます。こういうある種即物的と言えはよいでしょうか、その

ような観点から、書物に関する研究をしていた文献学者、考証学者をめぐるお話をさせていただくというのであれば、専門の先生、あるいは一般の方にも少しは珍しいことがお話しできるのではないかと思います、お引き受けさせていただいたわけでございます。

今回、「国学者の近代」という大きめのタイトルをつけさせていただいておりますけれども、実際には文献あるいは文献学者のミクロな話をさせていただいて、特に先ほど笹生先生からもご紹介いただきましたけれども、小中村清矩とか木村正辞といった学者について取り上げていきたいと考えております。

## はじめに

### 日本の古典をめぐって

はじめに「日本の古典をめぐって」ということから話したいと思います。実は現在、古典や古典籍というものは、身の回りに意外とあふれているのではないかと思います。非常に卑近な例ですけれども、2年後の大河ドラマは『源氏物語』をテーマにすると聞きますし、『源氏物語』でいえば、現代語訳などが何種類も出ております。さらに漫画なども出ています。文献から離れましても、東京国立博物館などに行きますと刀剣室に「刀剣女子」といった若い女性の方などが集まっているという様子も見たりします。様々な日本の古典や文化に対する関心が高まっているのかと考えております。

ただ、こうしたことは段階を経て、そうなったのかと思います。例えば、日本の古典がいつ印刷されたのかという話で申しますと、江戸時代に入る直前ぐらいから江戸時代の最初の50年ぐらいに大変隆盛した古活字版という印刷技法による出版物があります。『源氏物語』にしても『伊勢物語』にしても、あるいは『日本書紀』にしても、古活字版によって初めて印刷されました。それまでは書写されて伝わってきたわけです。印刷技術がなかったかということ、それまでも勿論あるわけですけれども、仏教書が対象でした。それが江戸の初めになると古活字版という印刷技術が隆盛するなかで、今我々

が古典とみなすようなものが次々と出版されていくわけです。

この古活字版ですけれども、活字印刷なので、一旦刷った後、活字をばらさないといけません。増し刷りができないという弱点がありました。商業出版が盛んになって書物のニーズが高まってくると、増し刷りができないことがネックになって古活字版は衰退したと言われていました。今、商業出版ということを申しましたけれども、古活字版は、例えば、後陽成天皇の勅版などもありますように、朝廷や公家、学者などが関わっています。ところが、商業出版の整版つまり版木による印刷が盛んになってきますと、そこまで丁寧な校訂がされない。そういったものが広く流布するわけなので、再校訂という課題が、江戸時代の国学者を悩ませることになっていくと言えるかと思います。

戦国時代から安土桃山時代を経て江戸時代に入る時代に、こういう現象が起こっていたわけですが、それでは、大きな変革期に当たる、江戸時代から明治時代の狭間にどういう動きがあったのかといったことを、書物をめぐる観点から申し上げようというわけでございます。

さて、国学の歴史考証、あるいは文献考証ですが、最初に、明治時代の学者が江戸時代のことをどう見ていたのかということに少し触れておきます。江戸から明治にかけて活躍した小中村清矩という国学者ですが、維新の前までは、学問はまず漢学に限るといようなことを回想しています。一方で漢学系の学者で、日本の実証主義の歴史学の祖とも言われる重野安繹は、文献を検討する技術的な部分で、国学のほうが漢学者よりもかえって進んでいたということを述べています。最近の一般的な評価にも触れておきます。例えば東京大学の史料編纂所の所長でいらっしゃる本郷恵子先生も国学者が収集して研究対象にしたおかげで、様々な史料が伝わっているということをおっしゃっています（『宇宙の時間。歴史の時間。』『淡青』26、2013年）。漢学中心の世の中である江戸時代にあつて、国学者の活動は、日本の史料あるいは古典といったものを見ていく上で重要だったとすることができるのかと思います。

## 近代国学者への視点

では、近代の国学者がどう評価されていたかという、長く否定的な評価があったように思われます。歴史学でいいますと、明治初期から漢学と国学の対立がありまして、漢学側が強くなるといったこともあったように思います。また、戦後の歴史学では、イデオロギー的な面から否定的に評価されたということもあったのかと思います。

近代の国学者への関心が高まって、再評価されるようになったのは平成以降かと思います。阪本是丸先生の御提言があって、そして齊藤智朗先生、藤田大誠先生、宮本先生の大きな研究が次々と出されております。

こういった近代国学者への再評価が進むなかで、彼らが近代国家建設に重要な役割を果たした、尽力をしたことは既に明らかにされています。今日お話をさせていただく木村正辞にしましても、民法の編纂にも関わっています。どう関わるかということですが、例えば、結婚という制度も律令の時代からあるわけで、戸令に始まる沿革を知るためには国学者の能力は重要であったわけです。それだけではなくて、法律を書くときには正しい日本語で書かないといけないわけです。言語学的な面でも優れた学者である木村は民法の編纂に登用されるわけです。

本日は近代になってもそういった活動の場を得ていた江戸末から明治期の国学者について、具体的な学問の方法に着目してお話を進めていきたいと思えます。

## 国学者・蔵書家

最後に、国学者と蔵書家の関係について申し上げておきたいと思えます。幕末・明治期の国学者には蔵書家が多い、これは、文献を研究している人たちですから、当たり前といえば当たり前です。井上頼圀、大沢清臣、木村正辞、黒川真頼、小杉楡邨、小中村清矩、榊原芳野、谷森善臣、松岡明義、横山由清など明治時代まで活躍した多くの国学者は、蔵書家としても優れた人物でした。

明治維新後の古書をめぐる市場の様子についても見てみますと、まず、最初の時期には欧米人や中国人が古書の購入をした。例えば、アーネスト・サトウだとか、楊守敬だとか、日本に赴任した外交官が大量に本を買って持って帰るといったようなことがありました。ところが、日本人の蔵書家は少なかった。特に国書の値段は安かったようでして、今もある古本屋さんですけども、浅倉屋さんでは明治16年10月に『好色一代男』を1円で売っている(反町茂雄『紙魚の昔がたり』明治大正篇)。小中村清矩が買ったものです。当時の『朝日新聞』の1か月の購読料が18銭だったそうですから、今の感覚でいうと数万円ぐらいのものかと思います。そんななかで国学者が国書を購入し蓄積していたわけです。

前置きはこの位にいたしまして、収集家も少ない中で蔵書家として国学者たちが多くいるということの意味を、次に木村正辞を取り上げて考えてみたいと思います。木村は当時から考証学者としての評価が高い人物です。

## 1. 木村正辞の蔵書と学問

### 木村正辞の経歴と評価

まず、木村正辞(写真1)の経歴であります。文政10年(1827)に生まれて、大正2年(1913)に死去した人物です。幕末には和学講談所に勤め、明治維新以降、文部省、司法省や東京大学に勤めました。万葉学者として広く知られている人でもありますけれども、先ほど申しましたように、法律の編纂などにも関わりますし、教科書を作ったりもしています。

大分古いものにはなりますが、木村への評価を見てみますと、久松潜一氏は、「書史的本文批評的注釈的研究に力がそそがれ」ていて、

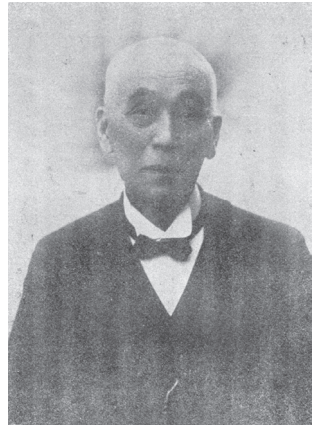


写真1 木村正辞肖像  
(国立国会図書館「近代日本人の肖像」より)

「近世と近代との境に立つ」人物だと評価をしています。また、『国史大辞典』には、「文献学的な立場から考証を行なって」「解釈困難な箇所を、ただちに本文の誤りとせず、そのままの形で訓釈を試みる」、そして「中国音韻学に造詣が深い」、「未刊のものが多い」といったことが書かれています。文献学的な考証をよくやっていた学者であって、未刊のものも多いという特徴がある人物です。

### 木村正辞の旧蔵書

未刊のものが多いということになりますと、旧蔵書への着目が必要になりますので、木村の旧蔵書について見てみたいと思います。お孫さんの木村正巳さんは、「古本珍本蒐集」が趣味だったと述べております。

木村には主に4つの目録があります。東洋文庫や天理図書館のものは小規模で断片的ですが、「<sup>つきのや</sup>欄斎蔵書目録」というまとまったものが2種あり、そのうち『大八洲』という雑誌に載ったものが、木村の編纂によるものです。正統あるうちの正にあたる部分だけが載っており、近代の出版物などを含む続は見当たりません。ただ、これが一番まとまっているものですので、これを確認していきたいと思います。

ここには1,316件の書物が著録されています。草稿やこれに載っていないものなども調べて、今のところ2,200件ぐらいまでは探すことができたのですが、どうもまだまだありそうな様子です。目録を見ますと、広い分野を所蔵しているということが分かります。どういう分野、どれだけの資料があるかということは、表を御覧いただければと思います(表1)。

中身を見ますと、歴史書でいえば、『古事記』や『日本書紀』などを複数所蔵していますが、『日本外史』のような史論書は含まれていないという特徴があります。物語も上古、中古のものはありますけれども、近世の物語などは含まれない。あるいは地理であれば、『風土記』が多いという特徴があります。こういったところから古代研究を意識したものであろうといった蔵書の特徴が分かるかと思います。

表1 木村正辞旧蔵書の分類と件数

乾 (和書)						坤 (漢籍)					
分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数
神書	58	法帖	4	文章	12	經	易	4	史	目録	39
正史	37	韻鏡	56	医書	7		書	5		儒家	4
雑史	25	万葉	64	本草	8		詩	4		兵家	1
偽史	1	勅撰	11	譜録	18		礼	5		法家	1
記録	1	総集	17	釈書	13		学庸	2		医家	7
編年	23	別集	19	釈書	1		春秋	3		芸術	8
律令	21	詩歌	5	目録			孝經	14		譜録	1
公事	33	歌合	9	卜家	2		論語	9		雑家	24
装束	13	百首	4	数量	7		経説	25		陰陽家	1
伝記	33	歌仙	13	教訓	2		訓詁	19		類書	10
氏族	17	雑歌	2	書画	3		字書	39		小説家	3
職官	18	楽曲	7	図録	9		韻書	17		積家	0
政書	8	詩	1	雑家	90		金石	6		道家	3
礼儀	4	狂歌	1	小説	2		史	正史		6	別集
地理	60	髓脳	17	類書	3	編年		2	道集	4	
目録	30	語釈	25	学則	6	職官		2	総集	4	
言詞	10	活語	23	合戦	3	政書		3	詩文	6	
字書	20	係辞	8	索引	34	伝記		0	詞曲	1	
訓詁	19	物語	32	群書	2	史鈔		0	索引	9	
金石	37	日記	6	類従		天文		3	集	総計	299
往来	1	紀行	2	総計		1017		地理			

次に今、旧蔵書がどこにあるかお話したいと思います。まず、本人が明治天皇に献上したものが宮内庁書陵部に数点入っています。それから、木村が亡くなった後、継承者が台湾などに移住するらしいのですが、その間に親戚に預けておいたところ、売ってしまったものがあるようです。村口書房という神田にあった古本屋さんへ流れたものが大量にありまして、今、多くは東洋文庫と大東急記念文庫に収められています。これは和田維四郎(雲村)、この人は書誌学者でもありますけれども、本職は鉱物学者です。この人が



岩崎文庫と久原文庫に分けて納めた結果、東洋文庫と大東急記念文庫に分かれてしまいました。というのは、三菱の3代目社長の岩崎久弥からお金を預かると同時に日立鉾山の久原房之助からもお金を預かって資料を買っていた。両方からお金を預かっていたので、この月は岩崎へ、この月は久原へと分けてしまったということだそうです。そのせいで二手に分かれてしまったという事情があります。さすがに、ばらして端本になったものは見当たらないさそうですけれども、関係書が分かれてしまった例が見受けられます。それから木村の弟子筋である佐佐木信綱を経て、天理図書館や旧お茶の水図書館（石川武美記念図書館）に行ったものもあります。

遺族の寄贈と思われるものは、東京大学の法学部図書館にも残っています。それから國學院大學にも残されているそうです。今回渡邊先生にお話を伺いましたら、確かに木村のものがあるとお返事をいただきました。ただ、木村文庫という形でまとまっていなくて、書架にほかの本と混ざっているということで、それを探すのはなかなか難しいというようなお話を聞いております。

そのほか、これは山口県立大学の熊本守雄先生からご教示いただいたのですが、そちらの附属図書館にも入っています。国立国会図書館にも2点だと思いますが、入っています。今でも、市場で流通することもあります。

初めから余談めいてしまいますけれども、旧蔵書の判断についてもふれておきたいと思います。蔵書目録との突き合わせというのは必要になりますけれども、蔵書印には図に挙げたようなものがあります（図1）。

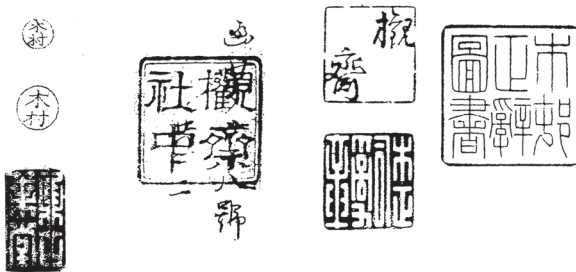


図1 木村正辞の蔵書印  
 (拙稿「木村正辞と旧蔵本の特徴」『岩崎文庫貴重書解題』6より)

それから、題簽や識語などに木村の筆跡があるものがしばしば見られます。これも木村正巳さんの発言ですけれども、比較的丸い字を書いていたとあります。ここに載せたような字を書いていました(図2)。そのほかにも特徴はありまして、例えば、表紙ですと、当時自分で冊子を作ることにはよくされていましたけれども、彼の好みの色はブルーであったり、茶色であったり、そういうような表紙がよく見られます。

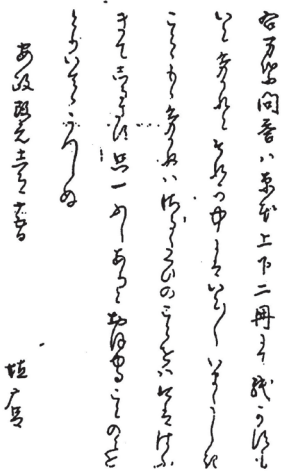


図2 木村正辞の筆跡(同上)

右掲唐國風土記一巻以平田氏所藏古鈔本合撰  
写矣余嘗以馬河氏藏中目連胤氏校心本確録  
今以二本比較書此本頗存舊色矣而其連胤氏  
本多所改故又今撰寫此本以感并文又矣  
癸三月下旬木村正辭志

防虫葉も特徴の一つです。当時、本に葉っぱを挟むことは、よくありました。イチヨウの葉っぱを挟むことがよくありますが、木村の場合は、お示しする茶色い縮緬のような、しわがあるのが見えますでしょうか、これはたばこの葉っぱですが(写真2)、これを本の袋とじの、袋の中に挟み込んでいます。防虫効果を狙ったのだと思われませんが、彼は専らたばこを使っています。それから、防虫剤の包みと書きましたが、何か防虫の粉が入った包みが挟まっていることもありました。私が経験した中で嬉しかったこととお話させていただきますと、反故紙に防虫剤、粉が包まれているような様子で、その反故紙を伸ばしてみますと、木村宛ての人力車の領収書でした。その本はほかに根拠となる特徴がなかったわけですが、木村本だと確定できたという経験をしたことが



写真2 木村正辞旧蔵本中の煙草の葉(講演者蔵)

ございます。

こんなお話をしましたのは、木村本にお気づきになったら、お知らせいただけないか、などということも思っていたのでございます。

## 木村正辞による万葉集をめぐる研究

さて、本題に戻りまして、木村がどのような研究手法を取っていたのかということについて、彼の研究の流れに沿ってお話したいと思います。

まず、文献目録・解題の作成を行っています。慶応3年、木村が最初に刊行した『万葉集書目』という本があります。万葉集研究に当たってどんな本が世の中に残っているのか、そこをまず徹底的に洗っております。写真では、「又一本」とずっと続いていますけれども、いくつもの写本を紹介しているので、写真のようになっていきます（写真3）。こういった本があるということを書き連ねている目録です。そして、明治の後半に活字にもなりますけれども、『万葉集書目提要』という解題も作っています。

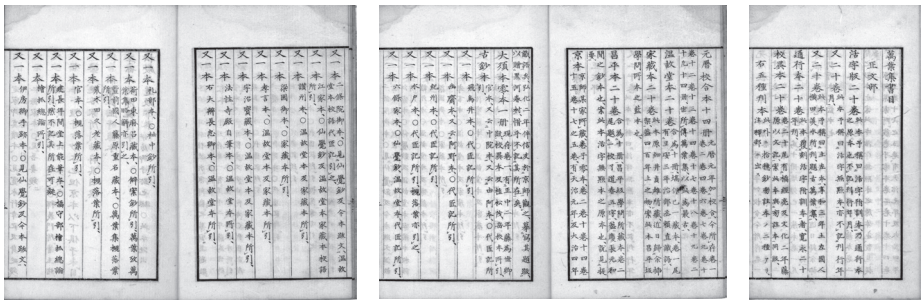


写真3 『万葉集書目』第1丁表～第3丁表（講演者蔵）

そういったいろいろな本を確認して、本文の検討をしています。2種の「槻斎蔵書目録」には、研究した本も含まれますが、「万葉」の分類に65種、70種の万葉集関係書が著録されており、東洋文庫の『書籍目録』には刊本7種、写本6種、注釈16種などが挙がっていますけれども、そういったものを基に、1つの本に万葉集の本文の異同を書き入れていく作業をしています。全て

合わせると20本の対校をしています。朱だとか、藍、代赭—茶色のような色です—、そういった墨で書き分けることをしています。さらに本文中には、字の脇に丸や四角の記号で目印をつけています。例えば、異体字・通用字を使ったものが、記号ですぐに見分けられるようにしているわけです。

本に分かりやすく書き入れるだけではありません。それを基に索引を作っています。たとえば、東洋文庫で所蔵している『万葉譌字画索』は、反故紙を使ってノートを作りまして、そこに罫紙、あるいは小さい紙でもって、どこに誤字が出現するのか記したメモを作り、並べ替えて貼りつけて索引を作ったものです。これは編集段階のまま使ったようですが、『万葉助辞例』『万葉語例』などは、もう少しきれいに整えて書き直していますけれども、「イ 発語」「イ 与に通」など言葉の使い方ごとの出現箇所ですとか、「助辞を語の中らにおける事」など事例の出現箇所といったものを索引にして、いつでも検索できるようにしていました。これは万葉集だけではなくて、『靈異記訓釈字類』などほかの文献についても作っています。

覚えもまとめており、特定の字、語、音訓などに関する言語学的なメモ、あるいは考証といったものを、『雑記』15冊、『説叢』22冊などに綴じ合わせています。例えば、自分のことを翁という例がここに載っていますということ（「翁 [万十八四十六] くさまくら たひのおきなと おもほして はりそたまへる ぬはんものもか 我ことを翁といへり」）ですとか、もう少し詳しく考証が記されているようなものもあります。

一方で、先行研究の検討もしています。木村自身が一人で検討することもしていますが、例えば、橘千蔭の『万葉集略解』を小中村、横山、間宮、久米らと会読、つまり勉強会を開いています。大体10日に一遍ずつ、持ち回りでそれぞれの家に行って勉強会をするということをしています。万延元年（1860）から慶応4年（1868）ということで、10年近く続けている。これは勉強会ですから、それぞれにメモを取っています。写真4は『万葉集会読記』という小中村のものですけれども、木村も『万葉集略解補正』という記録を残しております。

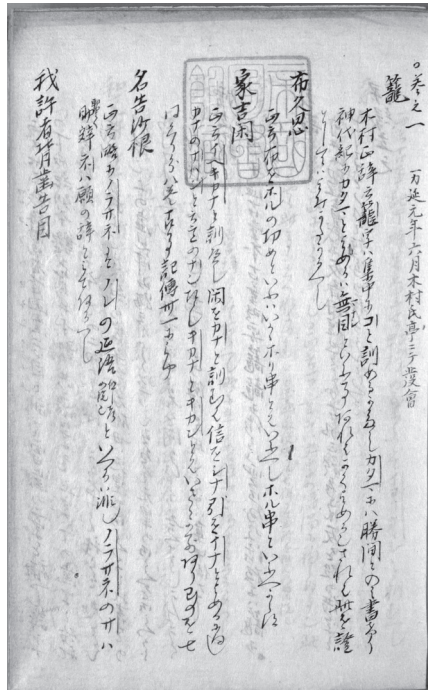


写真4 小中村清矩『万葉集会読記』冒頭部分  
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

さらに、学者同士で意見交換をしている様子も分かります。内容についての意見交換はもちろんですけれども、文章のチェックをしている様子も見とれます。例えば、「今本の刊誤」の「刊誤」は誤りという意味ではなくて、削り去るという意味もあるのだと、木村の先生筋にあたる岡本保孝が伝えまして、木村が納得していることが分かるものもあります（『万註是正』）。今でも、文章を書いたときに先輩や後輩にチェックしてもらおうということはよくあるかと思うのですが、そういうことをこの時代の人たちもやっていたわけです。

次に論文化と書きましたけれども、ここに挙げた「水薦野薦攷」で言えば、「薦」という字が「簑」という字の誤りであるとする説があったわけですが、

その字は木村が確認した万葉集の諸本には使われていないこと、中国の辞書に字が登場する初出を調べると時代が不一致だということが分かるので、その説は否定されるべきであると木村は考える。合理的な考え方をする人物です。

こういった細かい考証研究の蓄積の上で、彼の代表的な著作に「万葉集三弁証」があります。「三」というのは『万葉集字音弁証』、『万葉集文字弁証』、『万葉集訓義弁証』という3つの著作をまとめて指したものです。「字音弁証」は、特殊な訓の文字と用例の説明です。例えば、「為」という字は「イ」と読むかと思いますが、その訓を「ヲ」と読むこともあるのは、意見の「意」という字の訓にも「ヲ」と読ませるものがあるのと同じ理屈で転訛したのだという考え方をとる。「訓義弁証」の例でいいますと、「冬木成」と書いて「フユゴモリ」と読ませるそうですが、「成」という字は「盛」という字と通用する。その根拠となる例は中国の『易経』『詩経』『春秋左氏伝』にあることを示しているわけです。こういった言語学的な考証を本にまとめて、その成果を基に『万葉集美夫君志』という総合的な解釈書にまとめていったわけです。

このように、漢字への深い造詣があり、かつ古代の日本語の用例研究を徹底的に行って、緻密な検討をしています。そこには非常に整理された研究手法が見られます。その背景に蔵書があったのは、言うまでもありません。

## 2. 善本の希求と校訂

### 木村正辞旧蔵書の特徴

では、孫の正巳さんがいう「古本珍本蒐集」は本当に趣味なのか、そのところをもう少し見ていきたいと思います。木村の学問は、近代的と言ってもいいような手法を取っていたわけですがけれども、今一度、旧蔵書の特徴について見てみたいと思います。再び『大八洲』に掲載された「櫛齋蔵書目録」に拠りたいと思います。ここには注記が付されているものがありまして、「古版本」「古写本」などとあります。また例えば、北宋版『御注孝経』のように具体的に記すものもあります。これは大変な本で、今、宮内庁の書陵部

でございます。宋版は今、市場に出ますと億単位で取り引きされたりしてきますけれども、南宋版と北宋版がありまして、北宋版が珍しいわけです。その中でも仏教書と仏教以外のものでいうと、仏教以外のものはほとんど残っていない。世界で今十数点しかなく、その殆どは日本にある筈ですが、そのうちの1つになります。それを木村が持っていたわけで、優れた蔵書家であることが分かります。このようなものも含め、そのほかにもいろいろと古写本、古版本を持っていたことが分かりますけれども、それだけではなくて、模刻本22件、模写本25件を持っています。さらに校合をした本も46件と多数持っていたことが、蔵書目録の注記から分かります。

もう少し、具体的に見てみましょう。模写本ですが、天治本の『新撰字鏡』は、最終的に木村が写したものですけれども、この底本は、まず鈴鹿連胤という人が巻2と巻4を獲得しました。鈴鹿は以後30年以上この本を搜索します。安政2年(1855)になって、すでに持っている巻2、巻4、それから巻11を除く9冊を新たに発見します。その2年後、巻11をさらに発見するというので、12巻全てが揃うことになりました。すると、その翌年には、黒川春村が書写する。さらにその翌年には木村が書写するという具合で、書写を重ねることによって古い本の情報を入手しています。木村はその結果を考証し、さらに索引を作り、論文にしています。

1つの例を挙げましたけれども、そのほかにも木村はいろいろと校合をしたり書写をしたりしています。年代が判明しているものについて、識語などから抽出した書写・書き入れ年表(表2 次頁)を載せました。長い年月の中では大した数ではないと思われるかもしれませんが、木村はあまり書写の奥書を書かないところがありまして、その割にはたくさんあると思います。

さらに校合本は、東洋文庫で持っているものから『日本靈異記』『古事記』『干祿字書』など20程例示しましたが、多くのものが挙がります。漢籍だろうが、和書だろうが構わず校合しています。それは、先ほどお話をしましたように言語学的な考証をしていきますので、1つの資料に特化しない校合の活動が必要だったと考えられるかと思います。

表2 木村本書写・書入れ年表

年次	月日	史料名	内容	年次	月日	史料名	内容	年次	月日	史料名	内容
1854	1月9日	『仮字拾要』	写	1863	4月4日～ 4月23日	『元暦校本万葉集』 巻2	写	1864	10月17日	『万葉集』巻9	校
	8月15日	岡本保孝『撥韻假 字攷存疑』	写		5月4日～ 6月2日	『元暦校本万葉集』 巻4	写		10月17日	『万葉集』巻15	校
	8月21日	『万葉集玉の小琴』	写		5月上旬	『丹後国風土記』	写		10月18日	『万葉集』巻16	校
	11月25日	『新撰字鏡』	校		5月24日	『令抄』首巻	写		10月21日	『万葉集』巻10	校
	12月15日	『万葉問答』	抄録		7月	『袖中抄』	校		10月23日	『万葉集』巻11	校
1855	3月	『御国詞活用抄』	校	7月4日～ 8月2日	『元暦校本万葉集』 巻1	写		10月23日	『万葉集』巻12	校	
	7月10日	『元暦校本万葉集』 巻9	写	8月4日～ 10月12日	『元暦校本万葉集』 巻6	写		10月25日	『元暦校本万葉集』 巻10	校	
	7月	『干祿字書』	写	9月4日～ 10月29日	『元暦校本万葉集』 巻14	写	1865	1月1日	『御注孝経』	校	
	この年	『墨水鈔』	写	9月4日～ 9月29日	『元暦校本万葉集』 巻19	写		9月	『干祿字書』	写	
1856	4月26日	『元暦校本万葉集』 巻10	写	10月4日～ 12月8日	『元暦校本万葉集』 巻7	写	1866	4月5日	『足利学校書目』	校	
1857	4月29日	『元暦校本万葉集』 巻12	写	10月	『日本感靈録零本』	校		4月20日	『万葉考』	写	
	9月28日	『全齋読例』	写	11月12日	『元暦校本万葉集』 巻14	校		10月	『和名抄引書目録』	校 (補正)	
	11月23日	『駁全齋読例』	写	11月24日	『元暦校本万葉集』 巻19	校	11月11日	『和名本草』	写		
1859	2月	『袖中抄』 謄写	写	12月～元治 元年3月	『元暦校本万葉集』 巻18	写	1867	1月2日	『和名本草』	校	
	8月1日	『新撰字鏡』	写	3月2日～ 4月28日	『元暦校本万葉集』 巻4	写		2月	『令集解目録』	校	
	立冬	『清輪袋双紙』	写	3月27日	『出雲風土記』	校		3月20日	『古事記』	写校	
1860	2月13日	『仮字拾要』	校	3日	『随函録』	写	1868	6月20日	官版『干祿字書』	校	
	閏3月	『新撰万葉集』 謄写	写	6月21日	『万葉集』巻1	校		12月22日	『律疏』『賊盜』	校	
	6月	『上宮聖徳法王帝説』	写	6月21日	『万葉集』巻2	校	1869	2月9日	『豊後風土記』	校	
1861	6月11日	『稲葉通邦令ノ説』	写	7月11日	『万葉集』巻3	校	1870	2月11日	『肥前国風土記』	校	
	6月20日	『感心録残篇』	写	7月22日	『元暦校本万葉集』 巻18	校		5月24日	『歌会次第』	譲受	
	6月	『音徴不尽』	写	7月28日	『元暦校本万葉集』 巻4	校		9月28日	『明法道校本忌服令』	写	
	6月	『令見聞記』	校	8月24日	『元暦校本万葉集』 巻7	校		9月	『孫子祠堂書目』	校	
	9月	『播磨風土記』	写	8月25日	『元暦校本万葉集』 巻9	校		1871	4月26日	『漢書食貨志』 影鈔本	入手
	10月	『令見聞記』	校 (補正)	8月26日	『元暦校本万葉集』 巻6	校		1872	9月6日	『文館詞林』	校
	10月	『新抄格勅符』	写	8月晦日	『元暦校本万葉集』 巻20	校			11月24日	『万葉集』官本の 影鈔本20巻	入手
	—	『六合叢談』	写	9月13日	『元暦校本万葉集』 巻12	校		1876	6月頃	『日本全国ノ地積』 『地理寮森林報告』 第1号	写
	1862	2月29日	『長歌短歌古今相 違帖』	校	10月1日	『万葉集』巻5			校	7月22頃	『欧州各国蔵書ノ数』 『東京日日新聞』 (7月22日付)
		12月2日	『本草和名』	校	10月7日	『万葉集』巻7		校	1879	1月18日	万葉集
12月26日		『論語集解』	入手	10月9日	『万葉集』巻19	校	1886	4月16・19 日頃	『各国曆年考』『官 報』	抄録	
1863	2月上旬	『本草和名』	写・校	10月10日	『万葉集』巻20	校	1889	11月6日	『万葉通釈并釈例』	入手	
	3月27日	『桂川地蔵記』	校	10月11日	『万葉集』巻8	校	1893	11月	『日本感靈録』	校	
	3月下旬	『播磨国風土記』	写	10月12日	『万葉集』巻17	校					
	3月	『楓山秘府書目』	写	10月14日	『万葉集』巻18	校					



### 「復旧」への思い

要するに、木村は「復旧」を重視してまいります。校合もそうですし、模刻本や模写本を集めることもそうですけれども、より古い本文の情報、あるいは古い文献を集めていくことを重視します。後の人が改めた部分を正して、元の旧色に復することを木村は主張します。

その際に、文意を推測して私意を加えることを彼は否定します。例えば、『遊仙窟』にある識語を見ますと、「此書漢籍にハあれど、それが倭訓ハしも、いとふるきつたへにてこれによって古言(知)としるべきもすくなからず、さるを、今本の訓にハ、いかにぞやおほゆるふしもうちまじりたるにつきて、とかく(思)いひあへる人もありけるれど、そは伝写の誤りなることを、よくも正さ(兎角)るからのことなり」、つまり、この本は漢籍だけれども、古い和訓の内容を伝えている部分があるので、その古い言葉を知ることができるものも少なくない。議論になるものがあるのだけれども、それは転写のときの誤りであることを検討していないからいけないのだと述べています。

「古書を校合するに心得あること」という論文では、どんな書物にも後の人が解釈して変更している部分が混ざり紛らわしい。そのことを考えて取捨しなければならぬ。そもそも古書の校訂は、よくも悪くも作者の旧色を復元することが肝要である、と主張するのです。最後に挙げた『日本勅号記』識語でも、そもそも古書の校訂とは、よくも悪くも作者の元の在り方を復元することが肝要なのだと述べるわけです。

解釈の是非を優先するような人がいるけれども、これは似ていても異なることであって、作者自身が間違っているかもしれないし、自分では気づかないけれども、ほかの人がよい解釈をできるような場合もある。だから、元の姿に戻さなければいけないと木村は徹底的に主張していくわけです。

### 国学者たちの「復旧」例

では、これは木村だけのことかといいますが、そんなことはありません。国学者たちは揃って復旧ということを重視します。国立国会図書館の蔵書か

ら幾つか取り上げてみたいと思います。例えば、小杉楹邨、横山由清、大沢清臣といった人物であれば、『栄花物語』『神鳳鈔』（模写）『政事要略』『日本感靈録』『法曹至要抄』（小杉本）、『宇津保物語』『忍音物語』『播磨風土記』『丹後国風土記』『日本感靈録』『新抄格勅符抄』（横山本）、『和名類聚抄』『古事記』『職原抄』（大沢本）というように校合したり、模写したりしたものが見受けられます。例えば、小杉本でいうと、全体で130点ぐらいのコレクションですし、横山本は30点程度にすぎない、ごく小さなコレクションです。そのなかでも、このように多数の校合した本が残っています。

たとえば、小杉本の『栄花物語』を見てみますと、緑色、青、それから朱色、代赭色といろいろな色を駆使して、分かりやすくメモを書き込んでおります。緑は『日本紀略』、青は『扶桑略記』と決めています。ちなみに書き込んでいる本は古活字版です。古活字版にそのままどんどん書き込んでいってしまうということをしています（写真5）。こうした大量の書き入れがあるものは、国立国会図書館の蔵書中에서도、例えば、何枚も紙を張り込んでいる横山本の『宇津保物語』や大沢本『古事記』などもあります。

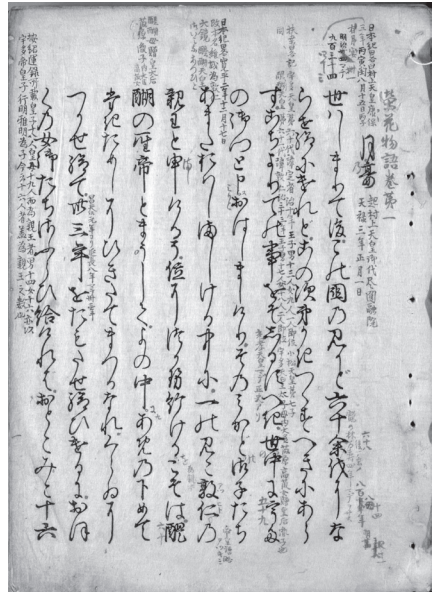


写真5 小杉本『栄花物語』  
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

### 「復旧」した資料の共有

榊原本の『日本三代実録』もそうした校合本です。ただ、これは、自分で校合したのではなく、小中村清矩が校合した『日本三代実録』を書写させた

ものです。「榊原芳野君の嘱に応じ、小中村氏本を以て之を対校す」という奥書があります。実は、榊原の蔵書は明治6年に一度焼失しています。その後、榊原は亡くなる明治14年までの間に大量の本を買い集める。没後、東京図書館（国立国会図書館の前身）に寄贈されたわけですが、1,487件の資料が残っています。そうやって一生懸命本を集めている中でも、必要な校合を書き写させている。校合が大切であったことが分かります。

善本が発見されると書写をするということも続けています。最初にお話しした『新撰字鏡』の例に加えまして、もう一つ『日本感霊録』もご紹介します。この本は高山寺本がよい本だとされておりまして、これは田中教忠（勘兵衛）という人が持っていて、今、吉野の龍門文庫にあります。明治26年11月、木村がその内容を写させてもらっています。そして翌月の12月には小杉が写しています。1か月違いということですから、木村から情報を得て、小杉が書写をしたのだらうと思われます。もしかすると木村本を小杉が写しているのかもしれませんが、とにかく善本あるいは善本の情報があれば書写をするということは、彼らが非常に重視したことでありました。

原田行造氏が、『日本感霊録』の写本の作成過程についてまとめているのですけれども（図3）、江戸の末から近代まで活動した人物ですと、栗田寛、久米幹文、木村正辞、横山由清、小中村清矩、木村正辞、小杉樞郎が挙げられます。書写されている過程を見ていくと、国学者同士お互いに情報を提供し、次から次へと書写していることがよく分かるかと思えます。

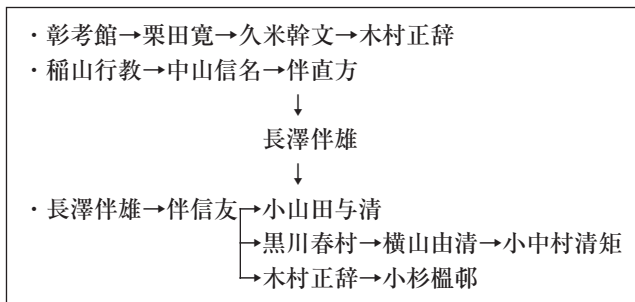


図3 『日本感霊録』書写の系統

こういった活動をもう少し紹介します。小中村清矩の日記を見ますと、明治15年6月に、加賀前田家邸で古書縦覧をしています。ほかに重野安繹、菅政友、それから木村正辞、黒川真頼、向山黄村—この場合は漢学者も国学者も入っていますけれども—、古書を見せてもらえるとなると、そこにみんなで押しかけていくわけです。ちなみにこの日の午後、小中村は川田剛の勉強会に出なければいけない日だったのですが、それを休んでしまっております。

このように当時の国学者にとって、文献を復旧するということが自体が大きな課題であったわけです。その意識は国学者に共有されていて、善本の情報は彼らの密な人的なネットワークの中で相互に情報を共有し、貸し借りをして書写をして蓄積していたことが窺えるわけです。つまり、善本の情報を互いに持ち合うことで、本文の整備が進み、学問の基盤ができていったと言えるかと思います。

ただ、校合・書写をするということは決して楽なことではありません。例えば、先ほどの木村正辞の写本作成、校合年表を見ましても、『万葉集』だけでも何日も何日もかけているわけです。そうすると、情報の共有方法の合理化ということが考えられてくるのだらうと思われます。そこで、次に出版についてお話してみたいと思います。

### 3. 復旧から出版へ～小中村清矩の「六国史」校訂～

#### 善本共有の必要性

善本共有の必要性はどこにあったのか、もう一度確認をしてみたいと思います。書物の内容が人によって違う、持っている人によって本の内容が違っていたならば、研究上、議論が成り立たないわけです。教育の場でも、同じ内容の本を持っているということは講義の前提になるかと思います。少し後の時代のもものになりますが、木村正辞の手紙をご紹介します。恐らく小中村に宛てたものだと思います。『政事要略』『朝野群載』『台記』『玉海』などの史料につきまして、「善本甚稀ニシテ、誤字・脱字居多、誦読ニ艱ス、其教師ニ質義スルモ数多、亦恐ラクハ十二七八ハ答フルニ由無ルベシ、冀クハ他

書ヲ以テ之ニ代ヘン事ヲ」と記しています。この文献は善本が少ない、だから誤字や脱字が多くて読みがたい。当然教師に質問する者が多く出るだろうし、教師も七・八割は答えられないだろう。だから、授業のテキストとしては、他のものを使って欲しいと書いているわけです。

後で東京大学の古典講習科のお話をしますが、その関係の綴りの中に入っているものなので、古典講習科のテキストとして何を使うかという話の中で、こういう問題が出てきたものと思われまます。つまり当時、定本と言える本がない文献が多かったことが分かります。また、小中村の日記の明治23年9月17日条を見ますと、『万葉集』講義を始めたけれども、『公式令』は、「いまだ図書館より生徒へ本渡らざれば休」とあります。本がないから講義を休むということもあるわけです。

こういう状況を考えていきますと、当然出版ということが課題になってくるだろうと想定されるわけですが、古典の出版を課題としていた国学者や周辺の人物は、幕末からおります。一番有名なのは和学講談所かと思えますけれども、「群書類従」や「六国史」など13種類の刊行事業を計画しています。「群書類従」は比較的規模の小さな文献を対象とする方針ですので、「六国史」のような大きなものなどは別途出版の計画を立てています。そのほか水野忠央の「丹鶴叢書」や、雲州本の『延喜式』、あるいは仙石政和による『類聚国史』も刊行されて、江戸時代に早く出版が進んでいるものがあります。ただ、和学講談所の刊行計画のうち、「六国史」は、『日本後記』だけしか刊行されませんでした。

### 小中村清矩による「六国史」校訂の建言

そういった状況のなかで小中村清矩が課題を解決しようと考えたわけです。まず小中村の経歴にちょっとだけ触れておきますと、文政4年(1821)から明治28年(1895)まで生きていた人物です。明治21年に日本の学位令で初めての文学博士号を授与された5人のうちの1人に選ばれていることから分かりますように、江戸時代から明治時代にかけての代表的な国学者の

一人であります（写真6）。

小中村は、幕末期、紀伊藩の古学館という学問所に勤めています。ここで「六国史」を校訂し、そしてその本を出版したいということを紀伊藩に建言しました。恐らく文久元年（1861）のことと思われます。いろいろな文献について善本が出てきているのだけれども、「六国史」は大部であるので、まだ善本がない。そこで古学館で校正して善本を作れば、古学館の名誉になる、ということ述べています。

作業方針に関しては、『日本書紀』から行うのでは時間がかかるから、比較的規模の小さい『日本文徳天皇実録』を優先して始める計画を立てています。そして校合する対象の本に関しては、狩谷棧斎、内藤広前、山崎知雄らの先学が既に校合している校本や、尾張、あるいは水戸家などの蔵書も使うこと、『類聚国史』ですとか、『日本紀略』などに含まれた断片的な情報も集めていくことを考えていました。さらに、紀伊藩から手伝い要員を得て1年ぐらいで校合を進め、その後、この分野に詳しい黒川春村や内藤広前にもチェックをしてもらいましょう、という計画を立て、紀伊藩に建言しまして認められました。実は、小中村は、紀伊藩に建言する前、嘉永年間から「六国史」の校訂作業を自分で進めていましたが、建言した文久以降、基本的に『日本文徳天皇実録』を校合する、要するに優先するようになります。

校訂しなければならない理由については、建言のなかで、今までの本は校訂が龕漏で、誤脱が多数あるということをおっしゃっています。「学者は先ず古写本を以て数度校合之勞、手数甚だ相懸り、初心之書生は読み分け難く、難渋至極致し候義ニ御座候」とあります。学者は古写本を入手して数度校合しないと使えない、初学者にとっては文意が通らず、読解困難だと言っているわけです。



写真6 小中村清矩  
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）

実際どうかということを確認してみます。「国史大系」本が出る前に流布していた寛政8年(1896)の版本を見てみますと、たとえば「弟」と「第」という単純な誤植、それから「道茂」と「道蔵」といった名前の間違いもあります。3つ目に挙げた例は、ちょっとひどい間違いだと思えますけれども、今の国史大系本では「新羅人」となっているところが、寛政8年本では、「新罪人」と書いてある。意味が通らないというのも分かるかと思えます。

### 『日本文徳天皇実録』の校訂作業

では、彼の活動はどうなったのでしょうか。『日本文徳天皇実録』の校訂作業ですが、校訂を写したものも含めて17種類の本と対校しています。

そして、『文徳実録攷異』を作成しています(写真7)。大きな文字やその下の文字は小中村の筆跡です。本文を修正した点を挙げて、なぜ、どういう根拠でそれを修正したのかということをもとめています。脇から書き入れた朱の字は木村の字です。結局木村が小中村に協力してチェック役を務めることに

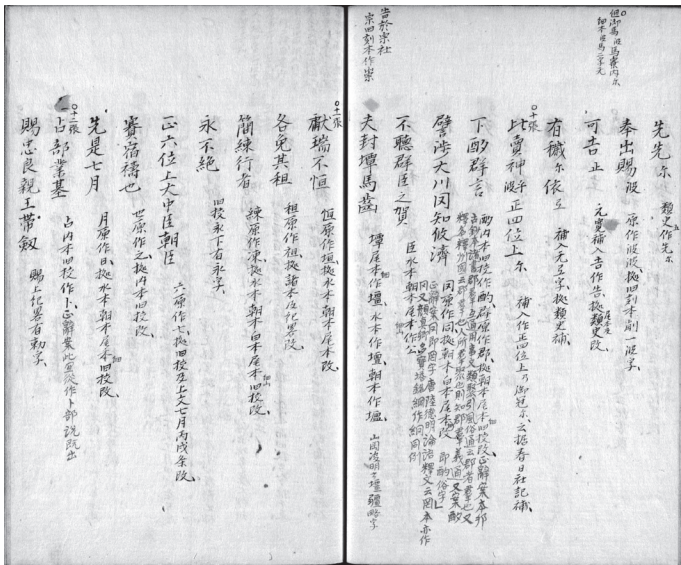


写真7 『文徳実録攷異』(国立国会図書館デジタルコレクションより)

なりました。木村が別冊を作って小中村に示している部分もあります。巻1、巻2、巻3まで攷異がありまして、慶応2年(1866)に巻3を作っています。校定本、つまり、誤りを正した本も巻3まで作っています。明治維新で中断するのですが、その後、明治2年、国学者が「六国史」の校訂を担当することになります。実は、木村が明治政府に建言したことが背景にあったようですが、木村、小中村、横山、あと埴忠雄(保己一の曾孫)が校訂を担当しています。これは内閣文庫に書き入れのある本が残っています。

それを基に、岡本保孝と木村が中心となって、本文と攷異を文部省で印刷するところまで進むわけですが、これもその後で中断したようで、出版されたという話はないようです。このように国学者は善本を作り出版しようと努力を続けます。ただ、「六国史」出版には至らなかったということなのです。

ここまでの話をまとめておきますと、国学者にとって、議論するにも教育の場で用いるにも、同一の本文であることは必要でありました。そこで、小中村らは「六国史」の校定本を作る計画を立てます。ところが、幕末期にも明治期にも中断してしまい出版に至らないということで、残念ながら、その成果は出ませんでした。その作業は無駄足だったのか、次章の「近代への継承」で見たいと思います。

## 4. 近代への継承

### 情報の継承

最後に「近代への継承」についてお話したいのですが、「情報の継承」と「人材の継承」に分けて考えてみたいと思います。まず、「国史大系」という日本史の基本的な史料集の編纂を例に、「情報の継承」について見てみたいと思います。

「国史大系」初版は、明治30年から34年にかけて、「六国史」などを対象として出版されています。増補版が大正年間、新訂増補版が昭和4年(1929)から39年にかけて出されています。校訂には歴史学者黒板勝美が携わりました。



当時から「国史大系」は評価が高く、大森金五郎—この人物は早稲田の先生ですけれども—「国史大系は経済雑誌社の田口博士」—これは田口卯吉です—、「田口博士等が編輯したもので活版本であります、校正がなかなか厳密であるから、良い本であります」という評価をしています。

また、新訂増補版を作ったときの趣旨書に当たるものですが、「本叢書の初版」、これが明治版ですけれども、これは「原本校訂の丁寧なると、印刷校正の厳密なるとにより、従来行はれたる幾多の旧本を一掃し、国史の定本として著書に論文に引用せられ以て今日に至れるもの」と、やはり原本校訂が丁寧であるということが評価されていたと記されています。

もう一つ挙げておきたいと思えますけれども、辻善之助という有名な歴史学者がいます。この人は黒板の後輩に当たる人物ですが、「明治三十年頃に、旧版国史大系の第一冊日本紀が出た時のうれしさ有りがたさ、今に忘れられない。その頃までは、日本紀を見ようとするものは、図書館へ行って、江戸時代の旧本版本三十巻を借り出す・・・」などということだったのが、「国史大系」本が出て自分の手許に置くことができるようになったと書いております。

ここで国史大系の底本が何かということが問題になってくるわけです。「国史大系」の底本は、凡例を確認すると、おおむね流布本をそのまま使っている例が多いですが、注目したいのは標注や校訂注の底本です。欄の上のほうに注がついています。この注によって、どちらが正しい、どの本にはどう書いてあるというようなことを判断できるようになっているわけです。

具体的にこの標注や校注をどこから取っているかということですが、「六国史」は、すべてに小中村の本が使われています。そのほかの文献にも、井上頼国、あるいは小杉樞邨、谷森善臣など国学者の本を多く使っています(表3 次頁)。大沢清臣ですとか、榊原芳野の本なども含まれています。

黒板の作業を手伝った歴史学者の丸山二郎氏は、『日本書紀』について黒板から直接聞いた話として「小中村清矩先生の手沢本を借りて、小中村先生が安政の頃内藤広前の校本を以て異同を註されしものによった」と書いています。つまり、校訂に優れているとされる「国史大系」本『日本書紀』を

表3 国学者の校本を用いた国史大系の本

校本所蔵者	文献名
井上頼因	日本紀略、扶桑略記、釈日本紀、公卿補任、延喜式、
大沢清臣	類聚三代格、栄花物語、大鏡、増鏡
久米幹文	栄花物語、大鏡
栗田寛	類聚三代格
小杉樞邨	扶桑略記、栄花物語
小中村清矩	日本書紀、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、日本文徳天皇実録、日本三代実録、日本逸史、公卿補任、栄花物語、今鏡
榊原芳野	栄花物語
谷森善臣	古事記、大鏡
御巫清直	神道五部書

作るにあたっては、小中村による作業を流用していたらしいのです。

では、どのぐらい影響を受けているのか、数を数えて確認してみました(写真8)。数え方にもよりますが、『日本書紀』の標注が4,400件程あるうち、

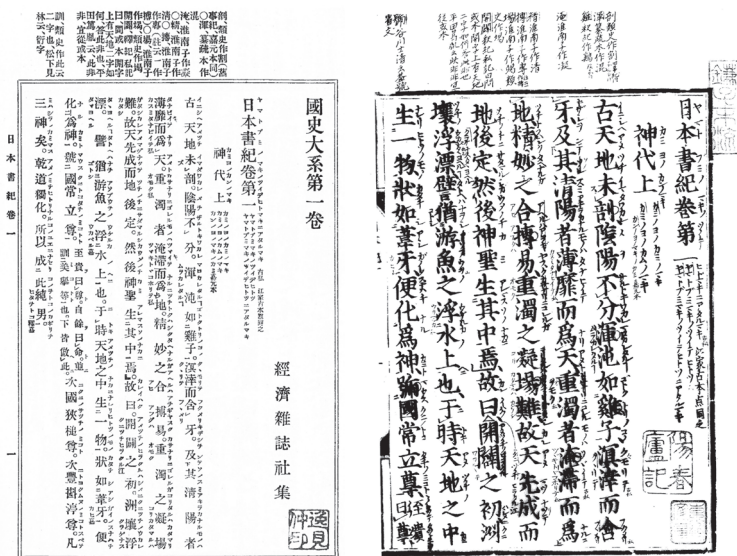


写真8 『日本書紀』(小中村本・右、国史大系本・左)(拙稿「旧版「国史大系」の編纂とその底本」『近代史料研究』11より)

小中村本と「国史大系」が一致したものが2,800件程ありました。追加した注が350件、小中村本から削除したもの、これは主に本文を修正したり確定したりすることで注が不要になったものですが、これが1,200件ぐらい、私の判断するところでは、そういう数が出てまいります。つまり、4,400件中の4,000件程度が小中村本に拠っていると見てよいのかと思います。

『日本文徳天皇実録』についても、序から巻2までを調べてみたのですが、280件中240件「国史大系」に引き継がれておりまして、かなり高い割合で小中村本に拠っている。もちろん黒板が付け加えている部分はありますけれども、小中村本に助けられているところが非常に大きかったことが量的にも分かるかと思えます。つまり、小中村の作業をそのまま引き継いで「国史大系」本の「六国史」は作られていたともいえます。

こうしたことは、「国史大系」だけなのかということですが、例えば、「史籍集覧」でも小杉本などを利用している例があります。

明治になりますと、いろいろな古典文献の叢書が次々と刊行されてまいります(表4)。そういった中には、国学者が関わるものがしばしば見られます。明治に活版の活字印刷の技術が登場する中で、国学者の学問的蓄積が活用されていくということが言えるかと思えます。

表4 古典資料翻刻の叢書の例

史籍集覧	近藤瓶城 編・刊	364種 468冊	
百家説林	今泉定介・畠山健編	吉川半七刊	52種 10冊
日本文学全書	萩野由之・落合直文・池辺義象編	博文館刊	38種 24冊
日本歌学全書	佐々木弘綱・信綱編	博文館刊	39種 12冊
群書類従	経済雑誌社刊	1276種	19冊
続史籍集覧	近藤瓶城編	近藤活版所刊	57種 70冊
帝国文庫	博文館編刊	382種	50冊
続日本歌学全書	博文館刊	146種	12冊
続帝国文庫	博文館編刊	702種	50冊 (除俗曲)
国史大系	黒板勝美編	経済雑誌社刊	36種 17冊
改定史籍集覧	近藤瓶城編	近藤出版部刊	465種 33冊

## 人材の継承

もう一つ、人材の継承ということをお話します。つまり、江戸時代末から明治時代にかけて活躍した国学者たちの後継者はいたのか、ということですから。東京大学の文学部に古典講習科という専門課程が、明治15年から21年まで時限的につくられるのですけれども、これは国学・漢学など旧来の学問の後継者が「種切れ」になる危機感から作られたものです。その教員に、国学者であれば小中村、木村、小杉などが入りました。この時期は、まさに明治15年に皇典講究所、明治23年に國學院が設置されるというような時期です。皇典講究所で行われる講演は、この古典講習科の教員や生徒だった人物が多く担当します。つまり、古典講習科で教員となった国学者やその継承者である生徒が皇典講究所や國學院の事業に関与していきます。例えば、明治25年2月3日の小中村の日記には、「皇典講究所・國學院にて選叙令、継嗣令をとく」と書かれています。

古典講習科の主な出身者としては、池辺義象や落合直文、鹿島則泰、黒川真道、佐佐木信綱、関根正直、萩野由之、松本愛重、和田英松などが挙げられますが、それぞれ第一高等中学校ですとか、『古事類苑』の編纂、國學院、学習院といった場で活動してまいります。とりわけ皇典講究所・國學院に関わる人物が多く見られますけれども、皇典講究所・國學院は古典講習科関係者が活動する、国学継承の場になっていたことが分かります。

彼らの学問を見るため、池辺義象という人物にちょっとだけ触れたいと思います。彼も國學院の講師などを務めた人物です。彼の古典講習科時代の受講ノートが岩瀬文庫に残っています。たとえば、『令義解』の講義を見ますと、一条一条の解説があり、その言葉について解説するというような講義を受けております。レジュメに『日本書紀』の講義の例も挙げましたが、これも同様の講義です。教師となった国学者の研究をそのまま伝える講義内容でありました。

さらに、叢書の刊行ということを考えますと、「日本文学全書」をはじめ池辺義象、あるいは、萩野や落合といった古典講習科の出身者が古典の出版

活動に関わってまいります。先にお示しした叢書だけではなく、池辺自身が編集した校訂本、注釈書も多くあります(表5)。池辺が注釈をした『栄花物語』の序文をみますと、「いずれも誤脱ありて読みがたき」、それまでの本は誤りが多いのだけれども、「近年小杉樞郵ぬしの校正せられたるいとよろし」ということで、小杉による善本を用いることができるようになって、それが教科書などにも使えるようになっていくということを書いております。池辺は様々な校訂本、注釈本を作っていますので、啓蒙的だという評価をされる場合もありますけれども、まさに校訂活動を重視した国学者たちを引き継ぐ学問を古典講習科で学び、その課題を達成しようとし、そして、校訂して定本が出来た後には、注釈書を作成し教科用にも使えるようにする、古典を確かなものにし、伝えていこうとしたという見方もできるかと思えます。

表5 池辺による校訂書・注釈書の例

『標註徒然草読本』(1890年)、『標註栄花物語抄』(1890～91年、関根正直と共著)、『新撰日本外史』(1892年、落合直文と共著)、『大鏡詳解』(1896年、同右)、『古事記通釈』(1911年)、『水鏡大鏡今鏡増鏡』(1914年)、『校定源氏物語詳解』(1916年、鎌田正憲と共著)、『新註対訳つれつれ草』(1920年)、『新註対訳十六夜日記』(1923年)、『新註対訳竹取物語』(1923年)、『新註対訳土佐日記』(1923年)
--

國學院大學の出版部も当時『国文註釈全書』を出しておりまして、木村正辞が序文を寄せています。「陋本俗本に就て研究せんか、妄りに駁難を生じ、大方の笑をうくべし、国家をして益々文明におもむかしむる階梯」、印刷業が盛んになって、よい本を出版することが重要だということを書いているわけです。近代にも活躍した国学者たち、そしてその継承者たちの課題は、きちんと古典を整備し、よい本を出版し、利用可能なものにしていこう、そこにあったと言えるのではないかと思うわけです。

江戸後期から明治期にかけての国学者たちが文献に関する情報を集積したものは、明治以降に活字出版が盛んになっていくなかで、活用されてまいります。つまり、国学者の古典校訂作業というのは、その前提として重要

だったわけです。小中村らの江戸から明治にかけての国学者、そして、古典講習科で学んだ彼らの弟子たちが担い手となり、皇典講究所や國學院などの場を得て活動していったわけです。

## おわりに

### まとめ

最後にまとめさせていただきたいと思います。まず江戸時代末の考証学者、木村正辞を取り上げて、彼の蔵書を基にその後の学問の方法を見てまいりました。彼の学問は合理的で、非常に緻密なものであったことが分かります。その学問を有効にするためには、正確な本文を持つ古典文献が必要であったと言えるかと思います。ですから、本文を復旧していくということが必要でありました。彼が集めた蔵書はそのことを達成するための前提でありました。

ただ、彼の蔵書だけでは、それは達成できなかつたろうと思われれます。課題が国学者に共通のものであったことから、同じような活動を国学者みなが行い、蔵書家でもある国学者が相互にネットワークを組んで貸し借りをする、そして本来の本文を共有していくということで、大きな情報空間が出来上がっていた。まさに文献の正確性を求めてやまないような情報空間ができていたわけです。言い換えれば、学問の基盤が国学者のネットワークのなかにできていたと考えております。

しかし、そこには筆写しなければならぬ苦勞がありました。そうなると出版・刊行が求められていくわけです。江戸時代からそういう活動は進められていましたけれども、例えば、「六国史」のようなものは、近代出版の技術が導入された明治期になってから、結実したということができるとか思います。

その背景には、繰り返しになりますけれども、国学者たちの文献をめぐる校定、復旧という活動がありました。このように見てまいりますと、彼らの時代は資料の情報を整備する時代であった。そうなると蔵書、つまり材料としての資料を収集するということの相対的な意味も大きかったわけです。

論理を華麗に示すというような研究とはいえませんが、彼らの実直な研究というのは非常に意味あるものであったと思います。当時、校定され出版された資料には現在でも使われるものがありますがけれども、学問の基盤づくりを彼らがしてくれたと言ってよいのだと思います。そして、最後に申し上げましたように、そうした活動を明治期に支えた場というのが皇典講究所であり、國學院であったわけです。

### 近代国学者の再評価

こうした、文献を一つ一つ掘り起こす、と言ってもよいのかもしれませんがけれども、校訂して、正しい、元あった姿を探り出すというような彼らの地味な活動をもう少し評価をしてもよいのではないかと思います。長く評価されない時期があったこともありますが、一度、活字本が印刷されてしまうと、その存在が当たり前のものになってしまうので、時代が過ぎますと、国学者の作業自体は評価されることは、殆どなくなってしまいます。しかし、それを再評価できないかというのが、私の思うところです。

手がかりは時が経てば経つほど、失われていきます。つい数年前まで谷中霊園に小中村清矩の墓がありましたが、御子孫の行方が分からず、現在は撤去されているかと思います。時代が経てば経つほど、彼らの痕跡は失われていくものと思います。また、彼らに関する文献も、図書館に納められているもののなかでも探しにくい類かと思えます。つまり、近代の活字本であれば普通に検索できますし、江戸時代のものであれば、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースなどで検索できますが、近代にかかる国学者の草稿は、図書館員にとって目録をとりにくいもので、必然的にデータベース化が後回しにされるという側面があります。私などもカードを引くだけのために、ある大学の図書館に何日も通った経験をがありますけれども、こういった資料について、少しずつでも紹介されていくとありがたいことだと考えております。

そうした中、國學院大學という場、特に研究開発推進機構の活動とが期待

されるということは言うまでもありません。例えば、國學院大學デジタルミュージアムを見ますと、国学関連人物データベースという非常に重宝なデータベースが作られております。こういう基礎的な情報を公にしてくださいということは、かつての国学者の作業と同様、学問の基盤を作る、非常に重要なことと考えています。

最後になりますが、笹生先生のお話のなかでも國學院大學は創立140周年を迎えられたというお話がございました。私の話の中でも國學院が文献考証の継承の場になったということをお願いしてまいりましたが、その後もまさに國學院大學という場が、彼らの学問を継承して、今に至るまで非常に緻密な研究を進めてこられた大学であるというように私は承知をいたしております。国際化の時代であるからこそ、日本人にとって文化的なアイデンティティというものが重要になるということは、言い古されていることだと思いますけれども、日本の文化に関わる研究を引っ張ってこられた國學院大學が今後150年、そして200年に向けて、ますます優れた研究の成果を発表されていく、そして御発展されることをお祈りいたしまして、私の話を終わりにさせていただきたいと思います。御清聴いただきまして、誠にありがとうございました。

\*本内容は報告者個人に見解に基づくものであり、報告者の所属組織の公式見解ではありません。

\*図表は拙著『考証の世紀—十九世紀日本の国学考証派—』（吉川弘文館、2021年）に基づき作成しました。

(了)